

連載 オブジェクト指向と哲学

第 51 回 オブジェクト指向を分析する - ギリシャの東と西

河合 昭男

<http://www1.u-netsurf.ne.jp/~Kawai>

「木を見る西洋人、森を見る東洋人」をヒントに東西 2 つの視点からオブジェクト指向を考えてきましたが、大雑把な世界観の比較であり、東洋でも大陸と日本との文化の違いなどには触れていません。西洋も一口に古代ギリシャと言っても一つではありません。今回は古代ギリシャの東と西の思想の違いと継承を、ソクラテス以前の哲学者で追って見たいと思います。

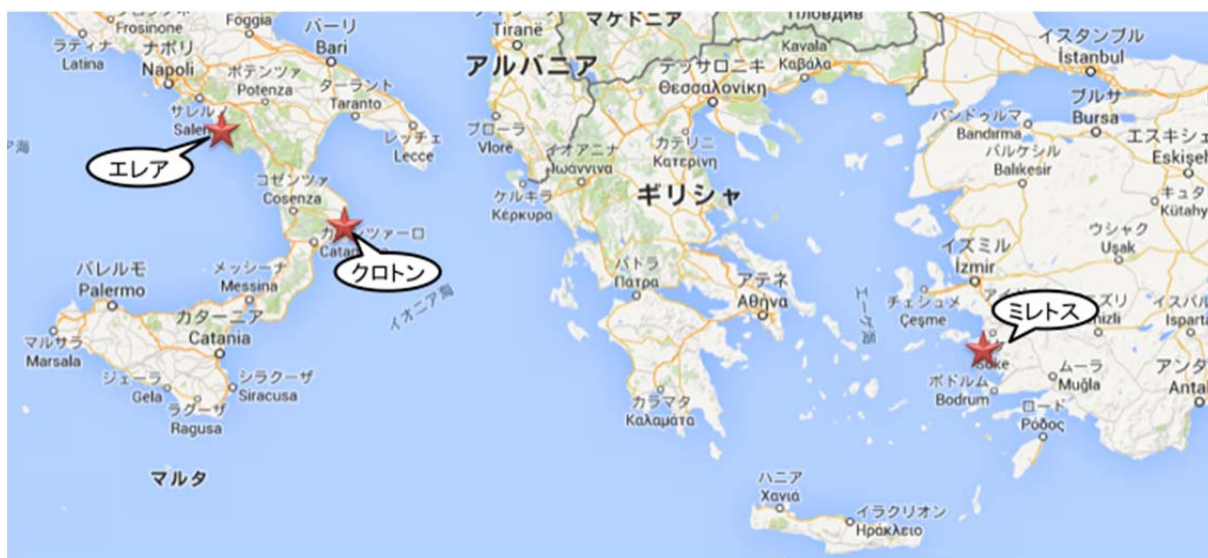
●東のミレトスと西のエレア

『ソクラテス以前の哲学は、ミレトスなど東の小アジア植民地とエレアなど西のイタリア植民地が中心となって始まった。東の哲学が自然学と唯物論、西の哲学が論理学と宗教性という特色があった。』([1]より抜粋・編集)

地図で位置を確認しましょう(図 1)。ミレトスはアナトリア半島(現トルコ)のエーゲ海に面したイオニアと呼ばれる地方に位置し、B.C.6 世紀頃ここからタレス、アナクシマン드로ス、アナクシメネスなど次々輩出してきてミレトス学派を形成します。レウキッポスはミレトス出身ですが、エレアでパルメニデスとゼノンに学びます。ミレトスのすぐ北にはエフェソスがあり、ヘラクレイトスが出ます。地理的にイオニア地方出身でもレウキッポスやヘラクレイトスは思想的にはミレトス学派とは別です。

エレアは B.C.540 年頃イオニア人が開いたポリスで[4]、イタリア南部の西側に位置します。B.C.5 世紀頃ここからパルメニデス、ゼノンが出てエレア派を形成します。この 2 人はのちにアテネを訪問し、当時まだ年若いソクラテスと対面し影響を与えます。

ピュタゴラスはミレトスのすぐ近くのサモス島の生まれですが、南イタリアのクロトンに拠点をおきピュタゴラス教団として独自の活動を行います。(B.C.540 年頃アクメー(40 歳頃の盛年)) [1]) このようにソクラテス以前に、ミレトスを含むイオニア地方とエレアやクロトンを含む南イタリアに展開する古代ギリシャ人の植民地で多数の自然学者/哲学者が輩出し、議論を展開します。東と西の間でも移動があり、ソクラテス/プラトン/アリストテレスに至るまで様々な人々の考え方が互いに影響を与えつつギリシャ哲学は熟成されてゆきます。



[Google Map に追加]

図 1 ミレトスとエレア

●東の哲学 タレス

『アリストテレスはソクラテス以前の哲学者たちを「自然学者」「自然について語るもの」と呼び、その始祖をミレトスのタレスとした[4]。』タレスは万物の原理という概念を最初に唱え、それは水であるとしたことで知られています。(B.C.585 年の皆既日食を予言した頃がアクメー[4])

タレスの万物の原理（アルケー）に関する議論はアナクシマンドロスに引き継がれますが、水では不十分で無限定者（ト・アペイロン）という概念を提唱します。この後アナクシメネスは空気がアルケーであるとします。アルケーの探求は弟子に引き継がれますが、師の考えを尊重しつつもそれに縛られることなく自由に発想を広げます。

このような世の中の役に立つとも思えない議論が自然消滅してしまわないで、2000 年以上前にタレスがエレアの地にまいた種は、アナクシマンドロスとアナクシメネスが育て、それをやがてソクラテス／プラトン／アリストテレスが開花させ、今日の西洋文明のバックボーンになって行くのです。

--

あの最初に哲学した人々のうち、その大部分は、質料（ヒューレ）の意味でのそののみをすべてのものもの（アルケー、原理）であると考えた。[2]

--

アリストテレスは、アルケーを探求し始めた初期の自然学者たちはものを質料としか捉えてい

ないと考えました。それを変化させればどんなものでもできると考えている。アリストテレスはものの存在には次の 4 原因あるとしています。(1)本質 (ト・ティ・エーン・エイナイ)、(2) 質料 (ヒューレ)、(3)始動因、(4)目的因すなわち善 (アガトン)。

つまり自然学者たちの称するアルケーでは、質料のみで他の 3 原因もカバーしなければならないことになる。

--

すべての存在のそのように存在するのは、それからであり、それらすべてはそれから生成し來たり、その終りにはまたそれにまで消滅し行くところのそれ、こうしたそれを、かれらは、すべての存在の構成要素[元素]でありもとのもの[原理]であると言っている。[2]

--

アリストテレスはこれには承服できません。一方、アリストテレスはタレスについて次のようにも言及しています。

--

ある人々は心 (プシュケー) が宇宙全体のうちに混合されていると主張している。そして、恐らくタレスもこのことから万物は神々で満ちていると考えたのである。[3]

--

タレスは単純に無機質の物質で世界が構成されているとは考えていない。アリストテレスの 4 原因の質料だけではないものも考えている。「心」はプシュケーの訳で、「精神」「魂」「靈魂」などと訳されることもある。([3]訳者注)

アリストテレスによると、タレスは磁石が鉄を引きつける現象も心の作用であると考えていたようです。

--

もしもかれが鉄を動かすという理由で石も心をもつと述べたとするならば、心も何らかの動かすものであると考えていたようだ。[3]

--

つまりタレスは万物の原理すなわち元のもの水であるとしましたが、目に見える水だけで万物が構成できる筈はなく、それは神々で満ち、プシュケーで満ちていると考えました。

●タレスと老子

タレスが水に根源的なものを見たのは、何か老子に通じるものを感じます。老子には水の例え

が至る所に見られます[6]。例えば、

--

第六章 谷神は死せず、是れを玄牝と謂う。(以下略)

第八章 上善は水の若し。(以下略)

--

など、まさに水はプシュケーで満ち満ちていると老子もタレスも考えたのではないのでしょうか。どちらも B.C.6 世紀頃の人で、東洋と西洋の文化の源となる人が離れた地で独立に同じ頃、同じことを異なる言葉で表現しているのです。

ちなみにウェイリーの訳では「谷神は死せず」は ”The Valley Spirit never dies.[7]”です。spirit はプシュケーです。

●抽象概念という概念

前回、「本質」という概念はソクラテス／プラトン／アリストテレスの時代にはまだ成立途上であり、その概念の必要性に気付き始めたが、それを表す言葉も確定していないということを見してきました。

本質つまり形相因はアリストテレスの 4 原因のひとつであり、自然学者の追い求めているのが質料因のアルケーならば方向性が異なります。

ミレトス学派自然学者達のアルケーは、ものを分解していったその原子なるものを見つけるものではありません。そもそも、ものを分解するとその全体としての形相は失われ、各部分には異なる形相が現れます。どんどん分解してゆくと元の特徴はすべて消滅し何の特徴もないものになってしまいます。

アルケーは元のものを見つけることで、水はどのようなものにも変化できると考えたということです。

ミレトス学派は万物の原理を追い求めますが、それは質料因だけでなく五感で捉えられないプシュケーの存在を前提にしています。『アルケーとしてあげられた根本物質が生きて動き千変万化する自然学説を物活論 (hylozoismus) と呼ぶ。』[1] ミレトス学派の 3 人は物活論であり、この後の原子論で唱えられた唯物論／機械論とは違います。

●オブジェクト指向

抽象概念という概念が確立できたなら、クラスを定義するには次にそこに属性と操作が必要です。属性は質料に対応します。操作は物活論またはプシュケーとつながってきそうです。

--

今回は西の哲学、エレア派の開祖パルメニデスやゼノンの考え方を見て見たいと思います。彼

らはミレトスの自然学者とは全く異なることを言い始めます。

【参考書籍】

- [1]今道友信、西洋哲学史、1987、講談社学術文庫
- [2]アリストテレス、【訳】出隆、形而上学、1959、岩波文庫
- [3]アリストテレス、【訳】桑子敏雄、心とはなにか、1999、講談社学術文庫
- [4]廣川洋一、ソクラテス以前の哲学者、1997、講談社学術文庫
- [5]クラウス・リーゼンフーバー、西洋古代・中世哲学史、2000、平凡社ライブラリー
- [6]小川環樹、老子、1973、中公文庫
- [7]Arthur Waley, The Way and Its Power – Lao Tzu’s Tao Te Ching and Its Place in Chinese Thought, 1958, Grove Press